



第9回 北東3支部技術士交流研修会

(社)日本技術士会北海道支部／北海道技術士センター 事務局次長
技術士（建設／総合技術監理部門）
森 隆 広

1. はじめに

今回で9回目を迎える北東3支部技術士交流研修会が、2006年（平成18年）10月13日（金）に北海道支部主催、都丸会長出席の下、「高齢化社会の問題と対策」をテーマに札幌で開催された。

以下、本交流研修会について報告する。

2. 交流研修会の概要

(1) プログラム

- 開会の挨拶：北海道支部長 大島紀房
- 来賓挨拶：日本技術士会会長 都丸徳治
- 各支部近況報告：北陸、東北、北海道
- 【基調講演】

- ・「適応」と「高齢化社会」：

(社)北海道開発技術センター 原文宏

●【研修発表】

- ・「技術士の社会福祉事業への参入」（北陸）：
(株)キタック 中山輝也
- ・「高齢者に対する優先施策提案の一手法～CS分析を用いた定量的優先度による施策提案について～」(北陸)：
(株)日本海コンサルタント 屋敷 弘
- ・「高齢時代——高齢者の生活と住居環境の現状について考える」(東北)：
(株)ユアテック 赤井仁志
- ・「高齢化社会の社会資本のあり方」(東北)：
国土交通省 東北地方整備局 俵谷祐吉
- ・「少子高齢化社会を移住定住から考える～滝川市ウェルカムプロジェクトの報告」(北海道)：
中空知広域水道企業団 高橋一美
- ・「高齢化社会に対応した観光について」(北海

道)：(株)ドーコン 伊藤龍秀

●【意見交換】

- 閉会の挨拶：北海道支部副支部長 斉藤有司

●【交流会】

(2) CPD 支援の試行

本交流研修会では、地方に在住し参加する機会の少ない会員への継続的学習支援として以下のシステムの試行を行った。

- ・「e-ラーニング」システムの試行について

IPを利用したライブ中継およびビデオ録画による教材提供を行うものである。今回は不幸にもNTT回線の不具合により本部とのライブ中継試験ができなかったため、機会を見て再度試行する予定である。

- ・「Pe-CPDシステム」の試行について

音声とPPTスライド画像を合成・記録し、教材提供を行うものである。本部事務局より西村文夫総務部長が出席して試行を行うと共に会場参加者に今回の収録結果を示しながらシステム概要の説明を行った。

(3) 基調講演のあらまし

◆寒冷適応：生理的適応と文化的適応

アフリカ大陸で発生した人類の拡散は北上の歴史である。寒冷な環境へは生理的適応では不十分であり、衣服による保温、火や住居による暖房などの技術によって、はじめて可能になった。このような環境適応を生理的適応と区別して文化的適応と呼ぶ。文化的適応は、人間の創意工夫によって雪氷や寒さを克服する能動的な行為である。今では都市全体が防寒機能を持つようになりはじめています。

◆寒冷適応：生理的機能の退行

人間とは、環境に適応する動物であり、しかも自

然環境だけではなく、自らが創りだした人工環境にも適応する。そのことが、場合によっては社会的コストを大きく増加させ、災害などのクライシス的な出来事に対して極めて脆弱な人間を多くしている可能性もある。



寒冷に対する生理的機能の退行

◆適応からみた高齢化社会：高齢化社会

高齢化社会に対する漠然とした不安は様々あるが、いずれも高齢化による身体及び精神活動の後退に起因している。しかし、高齢化社会は、日常生活ができる程度の比較的元気な高齢者がほとんどなのである。ただ、ちょっとした段差でつまづいて転んでしまう等、現状の社会システムでは、支障をきたすことが多くなる。このような高齢者が全人口の25%を超える社会のソフトとハードのデザインが高齢化社会問題と考えている。

◆適応からみた高齢化社会：バリアフリーな社会

このようなバリア (barrier) の無い住宅、ビル、交通機関、都市が整備された社会の中での生活を人間の適応の面から少し考えてみよう。

身体に障害を持つ方には、少しでもバリアの少ない社会であることが望ましい。しかし、バリアフリーな環境の住宅や都市に子供のころから生活した人間は、当然、バリアに対する適応能力は退行する。

バリアは、人間に身体的な負荷がかかるが、人間の肉体や精神を発達させる刺激でもある。適度なバリアは、人間の身体能力を向上させ、脳の発達も促し、人間にプラスに働く面もある。

決して、バリアフリーな住宅や都市環境をつくることを否定する訳ではない。ただ、元気な子供にまでバリアフリーな環境を提供することには疑問を持っている。

◆適応からみた高齢化社会：バリアブルな社会へ

高齢化社会は、全員が高齢者ではなく、各年齢層が、ほぼ同じ割合で存在する社会である。障害に併せてバリアフリーな環境を提供しながら、健常者や子供には身体的な能力を維持する環境を提供しなければならない。高齢化社会をデザインする土木技術者は、いわゆる土木工学以外の人間工学、心理学、教育学、生活科学などの広範な知識の取得に日頃から心がけることが肝要である。

(4) 研修発表概要と意見交換

多くの方々が理解しているものの、思ったよりも急激に進む高齢化社会に対応しきれていない実情が明らかにされた。社会福祉事業へチャレンジしようとする民間企業に立ちはだかる“前例がないと認めないお役所の倫理”の壁 (中山氏)、同じ高齢者でも都心居住者と郊外部居住者によるニーズの違い (屋敷氏)、住環境、特にトイレ・浴室・台所における改善チェックポイント (赤井氏)、存続の危機に直面している中山間地域における社会資本のあり方 (俵谷氏) などの問題が提起された。一方、観光客に占めるシニア層の増加を睥睨した観光振興の提案 (伊藤氏)、移住定住プロジェクトに取り組んでいる滝川市の活動報告 (高橋氏)、二地域居住のニーズ増加 (俵谷氏ら) など、活動する高齢者を支援する社会のあり方についても提案され、意見が交わされた。



3. おわりに

今回は、基調講演と北陸、東北、北海道の各支部から各2編の合計7編の発表となり、1編の内容を十分に説明しきれない弊害も見られた。今後は各支部からの発表を1編ずつとし、発表時間をもう少し長くとり、より充実したものにしていきたい。